

はじめての 万葉集

日本に現存する
最古の和歌集「万葉集」を
わかりやすくご紹介します

vol.
144

竜田山の桜

本歌は、天平勝宝七(七五五)歳二月十七日に(本年から三年は「年」ではなく「歳」が使われました)、大伴家持が竜田山の桜が散るのを一人で惜しんだことを詠んだ歌です。家持は二月初旬、兵部少輔として防人(まもり)を迎え送る業務のために奈良から難波に出向きました。兵部省は兵政全般にかかわる役所であり、家持は九州の防備を担当する防人の管理のために難波に赴いたのでした。

家持は四日前の十三日には難波津の桜が満開であることを詠んでいます(四三六一番歌)、竜田山を越える頃に見た桜はまだ咲き始めだったのでしよう。なお、二月十三日は現代の暦では三月三十日頃に当たります。

歌の表現を見てみましょう。竜田山を越えながら見たのですから、上の句は「竜田山越え来つつ見し桜花」のほうが自然です。しかし、「越える」ことを「見る」と同時にに行ったことを

たつたやま
竜田山 見つつ越え来し 桜花
さくらばな

おほしものやかもち
大伴家持(巻二十・四三九五番歌)

表現したいがために、「見つつ越え来し」という表現をとったものと思われまふ。竜田山を越えて来たということよりも、桜を見たということに力点がある表現と言えるでしょう。

第四句では、そうした桜が散ってしまうことを疑問の助詞「か」を使いながら述べています。「過ぎなむ」は動詞「過ぐ」に完了の助動詞「ぬ」と推量の助動詞「む」がついたものです。「過ぎてしまುದらうか」と、まだ起こっていないことを想像しています。

結局ではいつ桜が散ってしまうと言っているのかが明かされます。「わが帰るとに」の「とに」は「〜ころに」の意味で使っているものと思われまふ。家持が任を果たし帰京する頃には、再び見たかった桜はもう散ってしまっているのだらうと述べているのです。本歌はそのことへの残念な気持ち詠んだものでしょう。

実際、家持は三月三日、業務が終わったことを慰労するためか、仲間たちと宴会を催し、そこで「含めりし花の初めに来しわれや散りなむのちに都へ行かむ(つぼみとしてふくらんで

訳 竜田山で見ながら越えて来た桜の花は、散り過ぎてしまುದらうか。私が帰るころには。

いた花の、咲きはじめにやって来た私は、散ってしまった後に都へ帰るのかなあ。」(四四三五番歌)と詠んでいます。

既に桜が散り、春の盛りを過ぎた都に家持はどんな気持ちで帰ったのでしようか。そのことをうかがうことのできる歌は残っていません。

(本文 万葉文化館 榎戸 涉吾)



万葉文化館 イベント情報

◆県立万葉文化館・奈良県立美術館 連携企画展
「たびにしあれば 奈良県立万葉文化館・奈良県立美術館コレクションから」

5月16日(土)〜7月12日(日)

異郷へと向かう「旅」をテーマに、古代における公的な義務であった旅が、中世以降、参詣や文芸、絵画などの創作を通じて個人的な営みへと変化していく過程をたどる展覧会です。

※小・中学生、国内の高校生・18歳未満の人は無料。その他割引など、詳しくは当館HPをご覧ください。



「東海道往來図屏風」 奈良県立美術館蔵

●オープニング
ギャラリートーク

5月16日(土) 14時〜

「会場」日本画展示室

「講師」平出 実乃里(当館学芸員)

三浦 敬任(奈良県立美術館学芸員)

●大伴旅人帰京の旅 with 家持
古代の旅すごろく **無料・申込不要**

5月31日(日)

① 10時30分〜 ② 13時30分〜(各回約30分)

大宰帥の任を終えた旅人の帰京をすごろくで体験します。

「定員」各回12名 「会場」企画展示室

◆万葉集をよむ **無料・申込不要**

5月20日(水) 14時〜15時30分

「雑歌(2)」

(巻9・1682〜1694番歌)

「講師」中本和(当館主任研究員)

「定員」150人(先着)

※アーカイブ配信

(翌日から1週間視聴可)

◆にぎわいフェスタ万葉春

開催中〜6月7日(日)まで

※詳しくは当館HPをご覧ください。



奈良県立万葉文化館
☎0744-54-1850
🌐www.pref.nara.lg.jp/manyo